

令和5年度 S特選コース

第1回 入学試験問題 (2月1日 午後)

国語 (50分)

注意

- 1 この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 4 字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「」「」などの記号を含んだ字数として解答すること。
- 5 印刷がわからない場合は申し出ること。
- 6 試験終了の合図でやめること。

東京都立大学等々力中学校

受験番号		氏名	
------	--	----	--

一 次の——線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- 1、大仰な言い方をする。
- 2、人相を見て占う。
- 3、堅実な考え方をして生きる。
- 4、豊臣秀吉は大阪に築城した。
- 5、あの人には逆立ちしても敵わない。
- 6、木材を接着剤でコテイする。
- 7、工事中なので入らないようにケイコクする。
- 8、彼はわたしのメイユウだ。
- 9、機械をジザイにあやつる。
- 10、人員をサく。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

奥沢叶と宮田佳乃は北海道の中高一貫校に通う高校二年一組の生徒である。学校の寮に住んでいる東京都出身の宮田は、かつて全国コンクールで入賞するほどのピアノの腕前を持っていたが、風変わりな後輩に打ちのめされ、今は自信を喪失している。二人は第一回合唱コンクールに臨み、宮田は伴奏を務める。

大ホールの客席でプログラムを広げた奥沢は、自分の名前を凝視していた。

「伴奏の名前、変えなくてよかったあ。佐田先生、しつこかったからさ」

馨の言葉に頷きながら、奥沢はすぐ後ろの「ア保護者席に神経を尖らせていた。麗奈と戸越がこれを聞く頃には、指揮の件もばれてしまうのだろ
う。」

まだ十分に時間はあるのに、客席に人が増えていくにつれて、奥沢の不安は大きくなった。動悸がして、息苦しい。通路を挟んだ隣の列には、一年三組が座っていた。

「そろそろ静かに。他のクラスにも迷惑になりますから」

「後ろ方の座席から身を乗り出して、^①時枝がそう呼びかける。珍しくスーツ姿で、まるで式典の装いだ。よれた白衣も羽織っていない。保護者が来場する行事では、教師たちはみなよそゆきだった。

担任のある先生は、受け持ちのクラスの合唱をどこで聴くのだろう。一緒に舞台袖まで行くのだろうか。もしそうなら、自分たちの出番の時、時枝は客席にいないのかもしれない。

観てほしいな、と奥沢は思った。

せつかくなら、ちゃんと先生に観てほしい。

巨大な不安がある中でも、ひとりでも自分を応援してくれる人がいてくれるなら、あとほんの少しだけ頑張れるような気がした。

「先生は、三組の本番中も客席にいますか？」

中通路を通りかかった時枝を、奥沢はそつと呼び止めた。見慣れないスーツ姿が格好いい。

「いますよ、客席に」

「よかった。私たち、三組の次なので」

「最後ですよ。指揮、頑張つて」

すぐに立ち去ろうとした時枝を、先生、と奥沢はもう一度呼び止めた。逸る心臓を押さえながら、初恋の輪郭へひた向きな想いを投げる。

「指揮。全然ラクなんかじゃなかったですよ」

「え？」

「全然、適当に両手振ってるだけなんかじゃなかったですよ。私の努力、^A客席で観ていてください」

場内の照明が^B落ち、薄暗がりの中にアナウンスが流れる。ざわめきは^C落ち着き始め、ほの明るい緞帳の周りに人々の注意が向けられた。

リハ室での最終練習を終えた奥沢たちは、あとは出番を待つのみだった。

「出だしは美しく、丁寧。終盤の盛り上がりは思いつきりよ。ここから先のエリアでは絶対に喋らないで。じゃあ本番、頑張つてね」

厚くて重たい防音扉を、D 佐田が押し開ける。

舞台袖に送り込まれた一同は、私語せず指定された場所へと向かった。二つ前のクラスが退場すると、すぐに一年三組がステージ上へと進んでいった。その先頭には、あの風変わりな宮田の後輩の姿があった。

宇宙のように音もなく、ステージの裏はただ暗い。

想像していたよりもずっと客席の息づかいを近くに感じて、奥沢は恐怖を募らせていった。あの漏れた光の向こうに母と戸越がいるのかと思うと、今にも逃げ出してしまいたいそうになる。

プログラムが読み上げられると、大きな拍手が巻き起こった。ここから見えるステージの際は、特別に光っていた。

遠い喝采を聞きながら、奥沢はそつと目を瞑る。

すぐそこにあるステージの上は、目が眩むほどまばゆいのに、それを覗いている舞台裏はこんなにも暗い。暗くて、暗くて、息もできない。

こんなにも暗く孤独な場所が、宇宙に他にあるのだろうか？

② 世界で一番、暗い場所はどこか知ってる？

けたたましい前奏が舞台上から聞こえた瞬間、奥沢は異変に気がついた。

宮田が、怯えている。

その強烈な光景に、奥沢はわが目を疑った。

暗闇からステージの光を睨みつけながら、宮田佳乃はその大きな両手を震わせていた。③ 死に際の幼獣のように、その瞳は異常な怯えに揺らいでいた。

この頼りなげに震える少女は、一体誰だと言うのだろうか？

「宮田さん？」

ひそやかに呼びかけてみても、宮田は反応しなかった。いま傍らに立っている少女は、自分の知る宮田ではなかった。

その時、ヒュッ、と奥沢の中に、ひとつの疑念が流れ星のように過った。

これが、本当の宮田なのではないか。

不安に両手を震わせて、大きな光に怯えているこの臆病な姿こそが、④ 本人がずっと押し隠してきた彼女の本当の姿なのではないか？

奥沢のその閃きは、雷光のように孤独を割った。

「宮田さん！」

はつきりとそう名前を呼ぶと、ようやく宮田は振り向いた。毛並みの悪い野良猫のように、その目はすべてを恐れていた。気に食わない人だった。恵まれていて、優秀で。自分の中の劣等感をいちいち逆撫さかでする人。

小説の中のヒロインみたいに完璧で、憎かった。

「ここ、声……」

「あのね」

奥沢が毅然と手招くと、宮田はその眉根まゆねを顰ひそめた。戸惑いを滲にじませながらも、そろりと頬を近づける。

幼児が幼児にするように、奥沢は宮田に耳打ちをした。

「金の、雨なんだって」

舞台裏の黴かびた臭においに、古本のそれを思い出す。黴かびた臭においは孤独こどの匂においだ。

「……何が？」

「落葉松（注5）の、雨は、金色に光り輝いているんだって」

孤独の匂においに包まれながら、奥沢はそう囁ささいた。

どうしてこんなことを言っているんだろう、と自分でも不思議に思いながら、何度も鼻から息を吸った。そうしないと、涙がこぼれてくるからだ。

宮田さんのお母さんって、死んじゃったんだって。

「寮（注6）の、杉本さんが、言ったの」

「杉本さん？」

そう、と奥沢が答えると、宮田は腑ふに落ちない様子で首を傾かじげた。

「そういう、曲なの？」

「実際は、そんな曲じゃないのかもしれないけど、でも、あの人の中では、そういう風に、きらきら光ってるんだって。そういうの、わかる？」

「どうなの？」と宮田が問う。

視界がぼやけて、遠くの光はより輝きを増していた。これから舞台上に上がるというのに、目を腫はらして、ばかみたいだ。

「私は、それを聞いて、いいな、って思ったの。だから、もしかしたら、宮田さんも、そう思うかも、って思って」

私に、私だけの恐れや災いがあるように、宮田にもきつとそれがある。どうしてたったそれだけのことを、想像できずにいたのだろうか？

孤独で辛くて怖いのは、この世で自分だけだと思っていた。

一年三組の演奏が終わり、客席から拍手が巻き起こると、再び宮田の両手は震え始めた。

「旧宣教師館の、金木犀^{きんもくせい}。覚えてる？」

奥沢がその手をぎゅつと上から握り締めると、目を見開いて宮田はおもてを上げた。

「本当は、あの花はこの寒い土地には咲かないの。だから、あれがあそこに咲いているのは、一種の奇跡なんだって」

聴衆の拍手の勢いが失われていくのに逆らって、奥沢の声は大きくなった。

「だから絶対大丈夫。人が思うよりもずっと、この世で奇跡は起きるから」

宮田の震えが止まった瞬間、奥沢も胸の内でもう一度その言葉を唱えた。微びた臭いを突き抜けて、甘い芳香^{ほうこう}がよみがえる。

出て、と袖から合図が入ると、奥沢は強く頷いた。そのままステージへと先頭を切ると、もう宮田を振り返ることはなかった。

⑤ 不安も、恐れも、孤独も、緊張も、自分ひとりの持ち物ではないことを知ったから。

明るい世界へ踏み出した瞬間、奥沢叶の頭の中は真っ白になった。初めて目にした喝采の景色に、母や戸越のことさえも、少しだけ忘れてしまっていた。

私が思うよりもずっと、私に奇跡は起こり得る。

ステージの上の大きな光は、手の届かない遠くにあった。

(安壇 美緒「金木犀とメテオラ」より)

(注1) 「佐田先生」 ……音楽の先生。

(注2) 「馨」 ……宮田・奥沢の同級生。宮田と同じ寮生。

(注3) 「麗奈」 ……奥沢叶の母親。

(注4) 「戸越」 ……麗奈の恋人。

(注5) 「落葉松」 ……奥沢や宮田がコンクールで演奏する曲のタイトル。

(注6) 「杉本さん」 ……宮田佳乃が住む寮の寮母。

問 一、——線ア「保護」・イ「後方」・ウ「座席」・エ「白衣」のうち、他と熟語の組み立てが異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問二、——線①「時枝がそう呼びかける」とありますが、奥沢にとって時枝はどのような人ですか。「時枝は、」に続けて四十字以内で答えなさい。ただし、「指揮」「担任」という言葉を使うこと。

問三、

A

D

 にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|-----------|--------|---------|--------|
| ア、A—ちゃんと | B—ふっと | C—ゆつくりと | D—ぐうっと |
| イ、A—ゆつくりと | B—ぐうっと | C—ちゃんと | D—ふっと |
| ウ、A—しっかりと | B—さっと | C—ゆつくりと | D—どかんと |
| エ、A—きちんと | B—ふっと | C—わさわさと | D—ばたんと |

問四、——線②「世界で一番、暗い場所」の説明として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、「ステージの上は、目も眩むほどまばゆい」と対照的な表現であり、今いるのは自分の悲哀に支配された世界である。
- イ、「落葉松の、雨は、金色に光り輝いて」と対照的な表現であるが、皆で心を合わせて歌う時は光り輝く世界である。
- ウ、「孤独の匂いに包まれ」と対照的な表現であり、音のない宇宙のようにただひたすら暗い世界である。
- エ、「漏れた光」と対照的な表現であり、恐怖を感じる世界である。

問五、——線③「死に際の幼獣のように」の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、無邪気な生命力が宿る存在が、生きる希望を宿す様子で、希望の力を表している。
- イ、幼く力ない存在が、力をふりしぼっている様子で、健気な在り方を表している。
- ウ、幼くても獣であり、生来の強さがかすかに残っている存在で、最後の生命力を表している。
- エ、もともと弱いよいよ死んでしまいそうな存在で、ひたすら力ない様子を表している。

問六、——線④「本人がずっと押し隠してきた彼女の本当の姿」とありますが、「本当の姿」を「押し隠して」いる時の「彼女」の姿はどのようなものですか。それを表している部分を文章中から十六字で探し、抜き出して答えなさい。

問七、——線⑤「不安も、恐れも、孤独も、緊張も、自分ひとりの持ち物ではないことを知った」とありますが、その瞬間を比喩を用いて表している部分を文章中から十二字で探し、抜き出して答えなさい。

問八、この文章の表現上の特徴として適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア、読者の想像力を喚起する印象的な直喩法ちよくゆが用いられている。
- イ、読者が思わず考えてしまうような隠喩法いんゆが用いられている。
- ウ、読者がその様子をありありと想像出来るような擬人法が用いられている。
- エ、視覚、聴覚のみならず、嗅覚きよくかくにも訴える表現が用いられている。
- オ、視覚、嗅覚のみならず、触覚にも訴える表現が用いられている。
- カ、聴覚、嗅覚のみならず、味覚にも訴える表現が用いられている。

問九、Aさん・Bさん・Cさん・Dさんの四人が、この文章の内容について意見を述べています。適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。短文・俳句は一部表記を改めた箇所があります。

ア、Aさん——僕は種田山頭火の「このみちや いくたりゆきし われはきょうゆく」という句を見つけたよ。この道を多くの人が行き交っている。私は今日この道歩いている、というような意味の句。みんな同じような苦しみや悲しみを背負って生きている。私も同じだ、ということなんだろうね。かなりこの小説と似たイメージを感じたよ。

イ、Bさん——私は塚本邦雄さんの歌。いかにも青春、って感じで素敵よ。「ずぶ濡れの ラガー奔るを 見おろせり 未来にむけるもの みな走る」。どう？ ラグビーの試合の様子を歌っているんだけど、たとえずぶ濡れになっても、つまりは大変で辛いことがあるても、みんなが未来にむけて走っていくの。ね、似てるでしょ。

ウ、Cさん——「白鳥は 哀しからずや 空の青 海のおおにも 染まずただよう」。若山牧水の代表的な歌だけど、決して周りに染まらない、あるいは染まれない確固とした自分の在り方を歌っている。まずは自分だ、ということ。仲間であろう、と思う前に、独立した存在があるのだ、という心意気がこの小説と似ている。

エ、Dさん——僕は釈迦空さん。「葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり」。人恋しさも感じられるけど、自分と同じ山道を歩いている人への共感性っていうのかな、仲間を見出した嬉しさっていうのかな、そういう解釈でいくと、この小説で描こうとしている内容に通じていると思う。

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、設問の都合上、一部省略した箇所があります。

高度に発展した人工知能が登場したことの意味は、^①人間の知性を超える存在が現れてしまった……という単純な話ではないのです。現在の人工知能には、明らかに得意な分野と苦手な分野があり、まだまだ万能の存在ではありません。それどころか、人間には簡単にできることが、まったくできないこともあります。

例えば、知らない人の家に行ってコーヒーを淹^いれるのは、人間ならさほど難しくありません。家のどの辺にコーヒー豆があり、カップやフィルターがあり、ここでお湯を沸^わかして……と、自分で見当をつけることが簡単にできると思います。

ところが、人工知能ロボットでは、そうはいきません。見知らぬ場所に行ったら、コーヒー豆の置き場所一つ取っても、あり得る無数の可能性を前にして、うまく探せなくなってしまうのです。何十万桁^{けた}の計算を一瞬で行う一方で、とても簡単なことができないのです。

とはいえ、社会のなかでどんどん人工知能が使われているのも事実で、その影響なしに生きていくことも難しいと思います。だとすれば、人工知能の言うことが絶対の正解ではないという前提で、私たちはその使い方を考えていく必要があります。

そのときに、まず私たちは「人間の思考」と「人工知能の思考」がどういう点で異なっているのかを、しっかりと理解するべきではないでしょうか。

そこで、その二つを具体的に比較していきます。まずは将棋の棋士が、一体どのようなメカニズムで指し手を選んでいいのか、私自身の経験も披露しながら、お伝えします。その上で、^②人間と人工知能の似ている部分と異なる部分を明らかにしていきたいと思えます。

対局の際、棋士は大まかには^③三つのプロセスで将棋を考えます。

盤面に向き合った棋士は、相手の指し手を受けて、「直観」で大まかな判断をするところから始めます。

よく取材で、「何手先まで読めるのですか」と質問されます。実は、なかなか答えるのが難しい質問です。と言うのも、棋士は、あまり手を数えていないからです。実は、私たちは大量に手を読んでいるわけではありません。むしろ、棋士は「直観」によって、まずはパツと手を絞り込むのです。

将棋は一つの局面で、平均八〇通りの指し手があるとされています。それを、「ここは中心ではない。急所、要点ではない」と、思い切つて二、三手に絞るのです。カメラで写真を撮る際、ピントを合わせるように、「これこそ問題の中心だ」と思うところにフォーカスしていくイメージです。そして、それ以外の可能性は最初から考えません。あり得る手を全て検討していたら膨大な時間がかかってしまいます。

つまり、ゼロから一つずつ積み上げて考えるよりも、まずは「大体、あの辺りだな」と目星をつけて、その上で **A** 的に考えていく方が、よ

り早く答えに到達できるというわけです。

ただし、ここで言う「直観」は、決してやみくもなものではありません。あえて言葉で表現するなら、「経験や学習の集大成が瞬間的に現れたもの」です。あるいは「今、自分はどこにいてどの方向に進めばいいのか」を、大まかにつかむ「羅針盤（らしんばん）」のようなものです。これはその棋士の、これまでの歩みやストックしているデータによって裏づけられています。

こうして手を絞り込んだ後に、今度は「読み」に入ります。これが第二のプロセスです。

これは相手の次の手、それに返した場合の次の手、というように、とにかく先の手を予想して、シミュレーションしていく作業です。

しかし、ここで出てくるのが「数の爆発」です。なにせ、指し手の可能性は、掛け算で増えていきますから。こっちが三手を思いつき、それぞれに相手からの返しとして三手を思いついたとしたら、もうそれだけで九通りです。これを一〇手先まで続けると、三の一〇乗、六万弱の可能性を検討する羽目になります。

もちろん、これを全て読むことは人工知能にとっては一瞬ですが、^④人間にとっては現実的ではありません。「直観」によって手を絞り込んでい

るにもかかわらず、一〇手先を全て読むことは、多くの人が想像する以上にはるかに難しいことなのです。

そこで登場するのが、三番目の「大局観」です。その極意は、「B」ではなく、全体を見ることででしょうか。そのためには、具体的な一手から離れることが大事です。例えば、「この飛車を動かすのか、維持するのか」。そういう一手一手を検討することからあえて離れ、序盤から終盤までの流れを総括して、先の戦略を考えるのです。

この「大局観」の一番のメリットもまた、第一のプロセスである「直観」と同じで、無駄（むだ）な考えを、ここでいっぺんに省略できることです。大局を見通すなかで、「ここが好機だ」と思えば、何万通りもの手のなかから、「攻める選択肢（せんたくし）」だけに絞って、考えれば良くなるというわけです。「大局観」は、これまでの対局での経験値が活かせる部分です。

今、自分の将棋を振り返ってみると、一〇代や二〇代の頃は、記憶力や計算力を中心に指していたような気がします。対局全体にかける思考のプロセスのうち、「読み」の部分の計算力の占める割合が圧倒的に高かったのです。

C、若い頃は記憶力もあれば、勢いもありますし、冒険もできます。経験値がない分、いわば「いいところ取り」の戦術が取れることもあるでしょう。

また、瞬発力も変わる気がします。実際、持ち時間一〇秒のような限られた時間で素早く手を選ぶように言われたら、若い頃の方がより良い手を選ぶ力も高かったかもしれません。

それでも、プロになって三〇年が経ち、四〇代になった今の私が、もし二〇代の私と対局したら——勝つかどうかは、なんとも言えませんが——、それなりにいい勝負になるとは思っています。

なぜなら四〇代の私は、対局の経験値を蓄積してきたことで、「大局観」においては若い頃より伸びていると思うからです。

そのことで着手（次の一手）を考える際も、四〇代半ばの今は、二〇代、三〇代の頃とは変わりました。最初に局面全体の方向性を大ざっぱに「直観」で捉えて、そこから細かいところを論理的に詰めていく「読み」のプロセスに入る——ここまでは以前とあまり変わりませんが、局面全体を捉える「大局観」に力を傾ける比率が以前に比べて、明らかに高まっています。

若い頃は、指し手を読んでいって、この筋はだめだとわかったら、おおもとに立ち返ることを繰り返していても、体力や勢いでどうにかなる部分もありました。

でも、年を取ると、このやり方では体力の消耗が大きくなります。また、そもそもの外れなところにとらわれることは時間の無駄です。しかし今では、最初の段階で「見切りをつける」ことで、大幅に体力と時間が節約できるようになっています。

ただ、実戦での話を言うと、^⑤それを対局の場でうまくまとめられるかどうかは別問題です。ですから最近では戦略として、この経験値が活かせるような局面に持ち込んでしまうことを最初から考えるようになっています。

つまり勝負における、「アクセラとブレーキの微妙な踏み加減」のような、^⑥絶妙な感覚を活かせる勝負になれば、体力も記憶力も勢いもある、若手の棋士にも差をつけていけるというわけです。

「直観」、「読み」、そして「大局観」。まとめると、棋士は、この三つを使って対局中に思考します。

こうすれば、三〇分程度で手が選べます。もちろん、対局では一時間、二時間と絞り込んだ手の検討に時間を使うことがありますが、それは最善手を選ぶためです。

ただし、時間をかけるほど良い手が選べるかと言うと、必ずしもそうではないのが難しいところです。ちなみに、私がこれまで使った最大の長考は四時間弱ですが、今振り返ると五秒でも同じ手を指したと思います。

（羽生 善治／NHKスペシャル取材班「人工知能の核心」より）

問 一、——線①「人間の知性を超える存在が現れてしまった……という単純な話ではない」とありますが、その理由を具体的に示している箇所を、「〜から」に続くように文章中から二十五字以上三十文字以内で探し、最初と最後の三字を抜き出して答えなさい。

問 二、——線②「人間と人工知能の似ている部分と異なる部分を明らかにしていきたいと思います」とありますが、このあとの将棋の話は、人間と人工知能についてどのように説明していますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、人工知能は確率の高い可能性を検討するが、人間はできるだけ全ての可能性を検討するという違いがある。
- イ、人工知能は確率の高い可能性を検討するが、人間は検討すべき対象を最初に絞るという違いがある。
- ウ、人工知能は全ての可能性を検討するが、人間は確率の高い可能性を検討するという違いがある。
- エ、人工知能は全ての可能性を検討するが、人間は検討すべき対象を最初に絞るという違いがある。

問 三、——線③「三つのプロセス」について、筆者はどのように考えていますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、第一のプロセスである「直観」は、棋士の才能によるところが大きいと考えている。
- イ、第二のプロセスである「読み」では、労を惜しまなければ、最善手を選べると考えている。
- ウ、第三のプロセスである「大局観」は、長年の経験が活かせるものだと考えている。
- エ、三つのプロセスのうち、「直観」と「読み」が、「大局観」に比べて大事だと考えている。

問 四、Aにあてはまる言葉を文章中から漢字二字で探し、抜き出して答えなさい。

問 五、——線④「人間にとっては現実的ではありません」とありますが、なぜ「現実的」ではないのですか。その理由を「直観」・「数の爆発」という言葉を使って、四十字以上五十字以内で答えなさい。

問 六、Bにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、負けるが勝ち
- イ、終わり良ければすべてよし
- ウ、先んずれば人を制す
- エ、木を見て森を見ず

問七、Cにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、しかし イ、しかも ウ、ただし エ、なぜなら

問八、——線⑤「それ」が指し示す内容を文章中から一文で探し、最初と最後の三字を抜き出して答えなさい。

問九、——線⑥「絶妙な感覚を活かせる勝負になれば、体力も記憶力も勢いもある、若手の棋士にも差をつけていける」とありますが、それはなぜですか。その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から指定された字数で探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

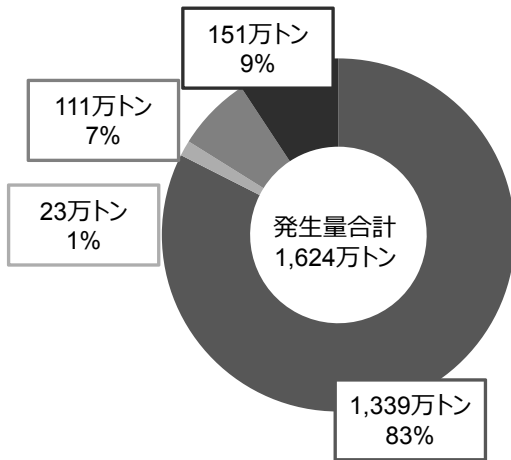
これまでの対局で1、三字を積み重ねたことにより、2、三字が磨みがかれ、それを活かせる局面になれば、若手の棋士と互角以上の戦いができると思っているから。

問題は次ページに続きます。

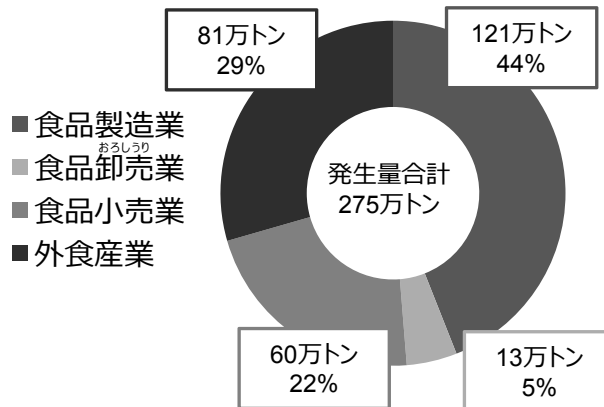
資料A 事業系の食品^{はいき}廃棄物等と食品ロスの発生量（令和2年度推計）

四 次の資料を見て、あとの問いに答えなさい。

①事業系食品廃棄物の業種別内訳

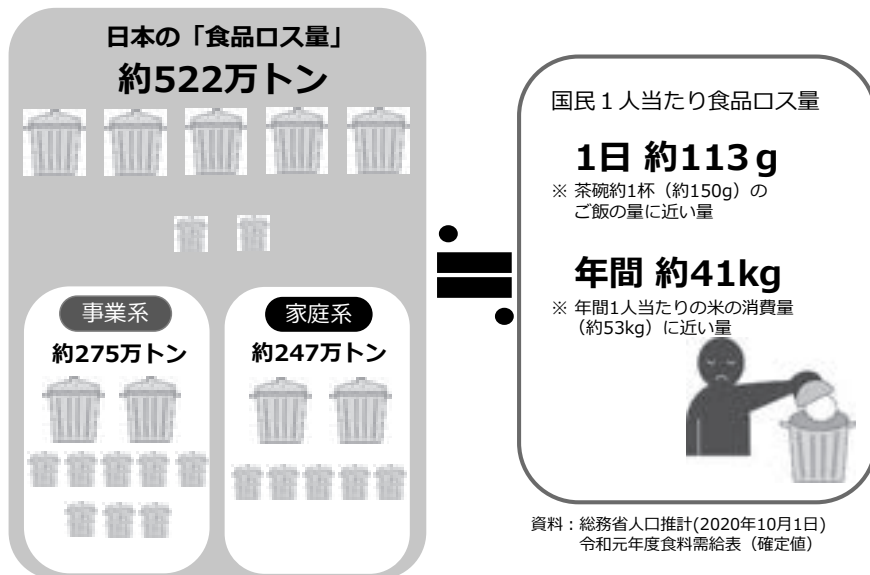


②事業系食品ロス（可食部）の業種別内訳

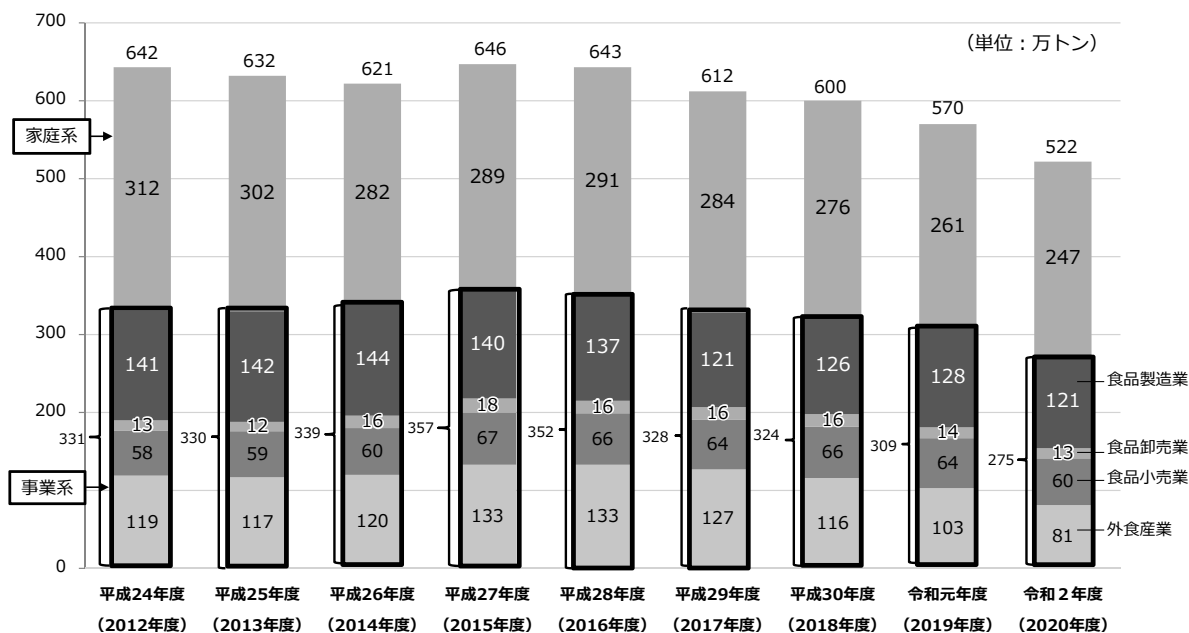


四捨五入の関係で、数字の合計が一致しないことがある。

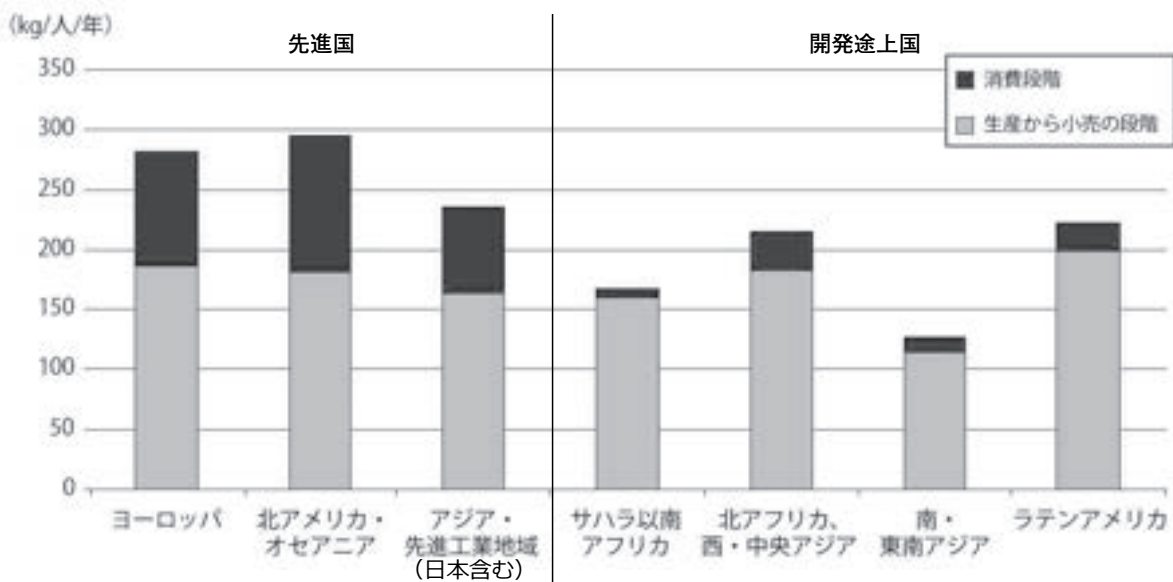
資料B 日本の食品ロスの状況（令和2年度）



資料C 食品ロス量の推移（平成24～令和2年度）

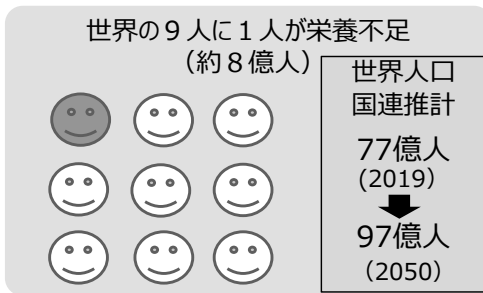


資料D 各地域における消費及び消費前の段階での1人当たり食料のロスと廃棄量



出典「世界の食料ロスと食料廃棄」
 (編集：FAO、翻訳・発行：社団法人国際農業協働協会)

資料E 食品ロスが引き起こす問題



資料F

「食品廃棄物」は野菜の芯や魚の骨、貝殻など食べられない部分も含んでいます。食品ロスは食品廃棄物の一部、というのが日本での定義です。

(出典: The Asahi Shimbun SDGs ACTION! データで見るSDGs【13】より)

資料G 食品ロス 社会全体で削減を進めよう

本来は食べられるのに廃棄される「食品ロス」は貴重な資源の浪費だ。「作りすぎない」「 I ない」の意識を共有し、削減を進めたい。

売れ残りや返品、食べ残しなどによる食品ロスは、2020年度は推計522万トンで、前年度の570万トンから8%減った。12年度の推計開始以降、 II だった。

食品メーカーや飲食店などの「事業系」が前年度比11%減の275万トン、個人が買いすぎた食材や食べ残しなどの「家庭系」は、5%減の247万トンだった。

政府は2000年度の980万トンから、30年度には489万トンに半減させる目標を掲げている。

20年度の数字だけ見れば、削減は着実に進んでいるが、外出産業がコロナ禍で仕入れを控えるといった特殊要因があったことに留意する必要がある。

これから社会生活がコロナ禍前に戻り、外出の需要が増えても、ロスの増加を最小限に抑え、目標達成につなげることが重要だ。

ロシアのウクライナ侵略の影響で、世界的な食糧危機が懸念されている。日本は食料自給率がカロリーベースで37%にとどまっている。社会全体で食品ロス削減の努力を続けねばならない。

食品業界の商慣習では、製造から賞味期限までの期間の3分の1を過ぎると、納品できないことが多い。これを2分の1に見直す動きや、賞味期限を年月日でなく、年月単位で表示することでより長くする試みが広がっている。的確な需要予測に基づく生産体制も構築してもらいたい。

小売店では、製造から一定の時間を経た弁当の値引きや購入者へのポイント付与が普及しつつある。割引幅や対象となる商品を拡大してはどうか。①恵方巻きやクリスマスケーキといった季節商品の予約販売も効果が大きい。

飲食店の場合は、食が細い人用の「小盛り」をメニューに加えることや、希望者に食べ残しの持ち帰りを認めることが、廃棄量削減につながるだろう。

家庭での食品ロスを減らすには、消費者自身が過度な「鮮度志向」を変えることも大事だ。

賞味期限は「おいしく食べられる」目安で、傷みやすい生鮮食品の消費期限とは異なる。期限が来たからといって、ただちに捨てる必要はない。

何より、買いすぎを防ぐための工夫が大切だ。家庭にある食材の品目や量をチェックし、必要なものにしぼる習慣が削減につながるのではないかと。

(注)「懸念」……気にかけて不安に思うこと。

(出典:「読売新聞」2022年6月17日記事より)

問 一、資料A～Fから読み取れることとして適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア、令和二年度では、事業系の食品廃棄物における食品ロスの割合は、食品製造業において最も低かった。
- イ、家庭における令和二年度の食品ロス量は、食べ残しがほとんどであったと考えられる。
- ウ、日本における国民一人当たりの食品ロス量は、先進国の中でも少ない方である。
- エ、消費前の段階における食料ロスと食料廃棄の一人当たりの量は、どの地域を比較しても開発途上国より先進国の方が多い。
- オ、家庭系の食品ロス量は、二年続けて増加した後、減少を続けている。
- カ、二〇五〇年には、世界の人口のうち、栄養不足に陥る人々はさらに一億人増加することが予想される。

問 二、資料Gの **I** にあてはまる言葉を、資料Gから四字で探し、抜き出して答えなさい。

問 三、他の資料を参考にして、資料Gの **II** にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、最高 イ、最少 ウ、最悪 エ、最多

問 四、——線①「恵方巻きやクリスマスケーキといった季節商品の予約販売」は何の例として挙げられていますか。資料Gから十五字で探し、最初の三字を抜き出して答えなさい。

